

京都, 山城盆地の地形と地質の成立過程からみた災害リスク地域

Disaster risk regions analyzed by formation processes for geographical and geological environments of Yamashiro basin, Kyoto

伊藤 有加 [1]; 増田 富士雄 [2]

Yuka Ito[1]; Fujio Masuda[2]

[1] 同大・工・数理環境科学; [2] 京大・理・地球惑星・地鉱

[1] Dept. Science of Environment and Mathematical Modeling, Grad. Engin., Doshisha Univ.; [2] Dept. Geol. and Mineral., Grad. Sci., Kyoto Univ.

京都南部の山城盆地では、地震や水害の被害が大きいと想定される地域にまで居住地が急激に拡大していることを、地形と地下地質の解析から述べる。

山城盆地は、木津川、宇治川、桂川の3つの河川が合流する場所で、昭和の初めまで巨椋池と呼ばれる遊水地が存在した。この地域は古くから洪水多発地帯であったため、人間が水害に対する防災のため幾度も地形を大きく変えてきた。現在、都市化による新住民の増加、被災経験者の高齢化による防災意識の低下した状況下で、地震や水害の危険地域が都市化の波にさらされている。

GIS(地理情報システム)と地下地質情報を用いた解析から、この盆地には災害リスク地域として、河川の氾濫原にみられる地震災害に弱い「厚い泥層」の分布域、洪水災害や地震災害に弱い「流路跡」が存在することがわかった。厚い泥層は、洪水破堤堆積物が堰き止め堤防となって山麓にできる池や低湿地、狭窄部の上流にできた遊水池、破堤に伴う氾濫流がつくる流路跡などにみられる。巨椋池干拓地は全域がこれにあたる。流路跡はすべてが危険地帯ではない、砂質堆積物からなる旧河道は災害リスク地域から除くことができる。こうした視点からみると、八幡市や城陽市や久御山町などにこれまで指摘されなかったいくつかの災害リスク地域が存在することがわかった。成立過程を知ることは、環境リスクの評価に重要なことである。